

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 9 月 28 日現在

機関番号：37119

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2014

課題番号：24616026

研究課題名(和文) 要介護高齢者の祖父母的ジェネラティビティ発達を促すケアの開発

研究課題名(英文) Development of an intervention for frail elderly to stimulate "Grand-generativity"

研究代表者

新木 真理子 (ARAKI, Mariko)

西南女学院大学・保健福祉学部・准教授

研究者番号：20335756

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は要介護高齢者の祖父母的ジェネラティビティ発達を促すケアの開発を目的とした。介護施設の高齢女性への面接調査によって、要介護高齢女性の「世話する」世界の存在を明らかにし、次に、ハイデガーの解釈学的現象学を理論的前提として、要介護高齢女性の語りを継続的に聞き、要介護高齢女性の「気遣い」の世界を明らかにした。その気遣いの世界は祖父母的ジェネラティビティの根底をなすものに連なるものであることが明らかとなった。看護者が要介護高齢者の語りを継続的に聞き、気遣いの世界があらわにされる過程は、要介護高齢者の祖父母的ジェネラティビティに貢献し得る介入方法であることが示唆された。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to develop of an intervention for frail elderly to stimulate "Grand-generativity". Elderly women were interviewed in the nursing facility where they reside. The first results revealed that Elderly women had the world of "Caring for others". From the perspective of Heidegger's hermeneutic phenomenology in "Being and Time", the second results revealed to the world of caring(sorge) on elderly women. Our results suggest that these are linked to the foundation of "Grand-generativity" in elderly women and the continuous listening process for elderly women contributes to develop of an intervention to stimulate "Grand-generativity".

研究分野：老年看護学

キーワード：ジェネラティビティ 気遣い

1. 研究開始当初の背景

エリクソンは、フロイトの流れを汲む自我心理学の立場から、自我の漸成発達理論を構築した。人間のライフサイクルを8つの発達段階に分け、各段階における発達課題と危機、その危機を解決する過程により生み出される心理社会的強さを発達図式として表わしている。ジェネラティビティは成人期の発達課題であり、それは「次の世代の確立と指導に関する興味・関心」を意味し、子孫を生み出す、生産性、創造性をも包含するものである。このジェネラティビティは、老年期においてもその基本的性質は変わらぬまま、高齢者は、成人期までの自らの世話機能を再吟味するなかで祖父母的ジェネラティビティという課題をもつ。要介護高齢者がケアされる現場は、援助を行なう者と援助を受ける高齢者が、相互に関わりあうことによって両者が自我発達を遂げる場であると捉えることができる。研究者は臨地実習において、看護学生と高齢者との間に「助け - 助けられ」関係の形成があることを観察した。要介護高齢者の自我発達には、かかわる援助側の自我発達がかわると考え、介護職員の仕事とジェネラティビティ発達の関係を調査し、仕事の有能感の高さがジェネラティビティ発達を促すという結果を得た。職員のジェネラティビティ発達が確認されたことで、常時向かい合う高齢者側の自我発達も可能性としては予測できる。そこで研究者は、介護施設における要介護高齢者の祖父母的ジェネラティビティ発達の可能性を調査研究することによって、解明の糸口をつかみたいと考えた。さらに、要介護高齢者が「常に助けられる存在」から、時には「人を助け、支え、世話する存在」へと、高齢者自身が実感できるためのケアを開発し、その有効性を実証することをめざした。

2. 研究の目的

(1) 特定地域の特別養護老人ホームの入所者を対象に、半構成的面接を行ない、生活史及び現在の心理社会的状況を聴き取り、エリクソンの祖父母的ジェネラティビティの概念を前提に置き、達成・危機状況、心理社会的強さの獲得状況を内容分析し、要介護高齢者の祖父母的ジェネラティビティ発達における実態を知ることを目的とした。

常に世話される側と見做され易い要介護高齢者における祖父母的ジェネラティビティの、特に「世話する・世話される」関係に着目し、その様相を明らかにすることを目的とした。

成人期に関節リウマチを発症し、入退院を繰り返す中で、生活機能が徐々に低下し、施設で介護を受ける高齢女性の「祖父母的ジェネラティビティ」の様相を明らかにすることを目的とした。

(2) ハイデガーは、実存現象を、「本質的に己を氣遣う経験の遂行として自らを開示する」ものという。「氣遣い」(Sorge)は、自己・実存の核心であり、人間は自らが最も固有な存在し得ることへ向かうために、人やものに注意を向け、それに影響された存在としてある。しかし、氣遣いは日常においては暴露されておらず、人は、何らかの障害に出会うこと等を通して、その氣遣いの在りように気づくことが可能になるという。高齢者は、要介護状態になることで、自分の周囲のもの・人との在りように変化が生じ、氣遣いの様相があらわになる可能性が開かれると考えられる。研究者は、人は生涯発達していく、という生涯発達学の見地から、要介護高齢者の自我発達、特にジェネラティビティの発達について、これまで研究を続けてきたが、その発達の基盤には、要介護高齢者自身が、自らの氣遣いの在りように気づくことがあるという仮説を立てた。要介護高齢者の「語り」を継続的に聞くことにより、彼女らの氣遣いの様相があらわにされる。それは高齢者自身の「確かにここに在る」という実感を強め、その実感があってこそ、次世代への関心としてのジェネラティビティの発達に向かうことができると考えられる。そこで、介護施設における要介護高齢者の「語り」を継続的に聞く、という解釈学的現象学を基盤とした質的帰納的研究を行なうことで、要介護高齢者の氣遣いの世界を明らかにし、ジェネラティビティ発達への介入の可能性を探ることを目的とした。そのための調査研究に先立って、ハイデガーの「存在と時間」における解釈学的現象学を学ぶことにした。

3. 研究の方法

(1) 特別養護老人ホームあるいは介護型ケアハウスに入所中の高齢女性4名を対象として、エピソードインタビューを行なった。1回1時間前後の面接を1名につき2～3回行なった。面接では、これまでの人生を通して「世話する・世話される」ことをナラティブ的に語ったものと、「世話」について意味論的にイメージや感じを語ったものを聴取した。ICレコーダー録音後、逐語録を作成した。分析は、コーエンの解釈学的現象学の方法に基づき、逐語録をナラティブテキストに再構築し、データを読み取り、全体との関連をみて構造的記述を行ない、解釈からラベルを導き出した。構造的記述はシュツツェのナラティブ分析を参考にした。

(2) 研究の前提となるハイデガーの解釈学的現象学を正しく学ぶための「語りと看護実践」研究会を発足させた。その研究会は、教育研究者と看護実践者が集い、現象学の専門家の講義による現象学の正確な理解をめざし、また、実践現場からの話題提供によって、実践と乖離しない学びをめざした。

研究会と同時進行で新たな調査研究計画を進めた。研究協力の承認を得た特別養護老人ホームで、まず3か月間の予備研修を行ない、入所者やスタッフとの交流を図り、研究参加者を選定し、面談を開始した。日々の生活のなかで、人やものにどのように関わって生活しているのかについて、自然な会話を進めるなかで、思いや考えを聴いていく方法をとった。1回1時間以内とし、週に1回の面談を3か月継続的に行なった。面談内容はICレコーダーに録音し、面談終了後にその都度逐語録を作成した。研究者5名で、逐語録について、解釈学的現象学の分析方法を参考にして解釈を行なった。

4. 研究成果

(1) 要介護高齢女性の「世話する・世話される」世界として以下のラベルが導き出された。【幼少時から育まれた関係性への有効な手段としての能動のおしゃべり】では、ほとんどがベッド上生活だが、能動なおしゃべりの力が、今も他者とのユニークな親密性を形成し続けている。【自然の恵みを媒体とした人との親密な結びつき】では、自然の恵みによって培われた人との交流体験が今も人との親密な結びつきを強めている。【好きなことの貫きからもたらされた「世話する・世話されること」の一元化】では、好きなことを貫く道筋でいつのまにか育まれた人との親密な関係性が、世話する・世話されることの区別が不明瞭になるほど一つの在り方として在る。【先祖から受け継がれた人としてのあり方の終生実践】では、祖母から母、娘へと受け継がれた教えの、「人間は生のある限り人の役に立とうとする」をこの先も全うしようとしている。他のラベルは、【相手から与えられることばによって湧き上がる自らのケアする力】、【自らが世話された体験を源としたわが子への親密な関心の継続】、【親に負担をかけまいとする強い意思が生み出した驚異的回復力】、【確執のあった姑の最期における真人間としての出会いが支える今の生】等である。要介護女性の「世話する・世話される」世界は、過去の生き方を強く反映しており、介護を受け、世話されながらも、人を「世話する」世界も、それぞれの在り方で確かに存在していた。

関節リウマチで入退院を繰り返した後、介護施設に入所した高齢女性のなかで、「祖父母的ジェネラティヴィティ」は日常的に確かに育まれていた。介助なしでは立ち上がれず、長く座っていると疲労が強く、臥床しているだけでも頸の固定が困難な状況のなかで、唯一使える片手の力を使い、職員との交流を可能とし、相手から与えられたことばをていねいに受けとり、自分の成長に結び付けていた。ほぼ全介助を受ける高齢者であっても、限られた身体状況や環境のなかで、他者と交流し、メッセージを伝えていくことが可能であった。その背景に、幼少時の豊かな自

然や親族とのかかわり、成人後の職業体験やさまざまな役割体験があった。それらが時を越えて、現在の彼女の「祖父母的ジェネラティヴィティ」の発達に大きく影響を与えていると考えられた。

(2) 「語りと看護実践」研究会の活動成果

研究会は2013年に発足し、現在まで4回開催した。メンバーは、大学の教育研究者、臨床看護師、介護士で構成され、固定メンバーは10名前後である。各回のテーマは、「現象学による人間のみつめ方」、「ハイデガーの『時間性の概念を手がかりとして要介護高齢者の『生のいづき』を感じること』」、「日常性を解釈するとは」、「要介護高齢者の『気遣い』に着目した介入の可能性を探る」であった。この研究会の趣旨は、ケアの実践者と教育研究者が集って、現象学を学びつつ、ケアにそれを取りこむ道を探ることにあつた。まず現象学の専門家の講義を受け、臨床での高齢者とのかかわりに関する話題提供を行ない、意見交換し、現象学と結びつけた解説を聞くという形で行なわれた。なじみのない現象学的用語にはメンバー全員が戸惑うが、できるだけ現象学を誤って理解することなく、日常のケアに生かしていく方策を探るという点では一貫した流れができてきたと考えている。要介護高齢者の「生のいづき」を感じて考えた回では、「現存在」を<生命のいづき>と置き換えてみる(古東)ことで、要介護高齢者の現存在を、生き生きと捉えることができないか、と考えてみた。要介護高齢者は、その都度過去を振り返るが、それが施設生活を生きる今に直接的につながってこそ、彼らの本来的投企が実現するのではないか、ケアする立場としては、要介護者は、「過去を振り返っている」という認識から、過去をもち、未来を見据えた現在に湧き上がる生を生きている、もしくは生きようとしている、という認識を持つ必要があるのではないか、また、要介護者の「過去の回想」を、回想のままにとどめておかないかかわりをめざしていく必要があるのではないかと提起した。メンバーからは、話を聞きながら患者さんとの対応が浮かんできて、あの時患者さんはああだったのかな、こうだったのかなとリアルに情景が浮かんでくる、現象学的な見方が少しずつわかってきた、等の声が聞かれた。

この研究成果については紙上発表を予定しているため、結果の記述を詳細に行なうことには限界があるため、主に解釈のプロセスについて記述する。特別養護老人ホームの高齢女性で、80代、90代の研究参加者2名の「気遣いの世界」を明らかにするために、まず解釈の参考としたのは、松葉・西村による「現象学的看護研究 - 理論と分析の実際」である。パラダイムテキスト全体を読み、解釈学的循環を繰り返す、別の事例をパラダイムケースに照らして解釈する、自分のバイアス

や盲点についての批判的検討を重ねる、という流れでデータを検討していった。研究参加者A氏の葛藤は、内的エネルギーの萎縮なのか、それとも濃縮と捉えるのが妥当なのか、繰り返し会話に出現する「自分の通ってきた道」ということばはA氏にとって何を意味するのか、もう一方の研究参加者B氏と共通する幼い頃からお寺参りは、両者の「気遣い」にどうかかわっているのか等、研究者らで討議し合った。両者の対比で明らかになったことの一つは、自らの要介護状態に関わる気遣いについてである。両者とも片麻痺という不自由さをもちながら生活していながら、その不自由さの意味合いがそれぞれ異なる。直接不自由さに働きかけて生活することが主軸となっているA氏と、不自由さに直接働きかけず、他の要因のために、むしろその不自由さが薄められていく状況が生じているB氏。そしてその状況の違いは、両者のこれまでの生き方に大きく影響を受けている。また似たような文化基盤のなかで幼い頃からお寺参りを続けた両者だが、A氏とB氏では、その意味合いも大きく異なっている。B氏の場合は、お寺のお説教にまつわるエピソードと彼女が後年行なう歌や芝居の世界とがほとんど等価に語られる。両者の「気遣い」の世界を解釈していくと、個々の祖父母的ジェネラティヴィティの在りように連なってくる。高齢者の「気遣い」の世界は祖父母的ジェネラティヴィティの根底を成していることが、両者の語りを通して明らかにされている。また、本研究のもう一つの課題である、祖父母的ジェネラティヴィティ発達に向けた介入研究の可能性については、相手の「気遣い」の世界があらわになるための聴き手の介入方法の開発が、有効な手段になることが、本研究によって示唆された。面談を重ねるなかで後半になると、データの会話だけを読むと、両者ともに、聴き手が発したことばなのか、語り手が発したことばなのか判別が困難な会話の流れが生じている。これは、語り手と聴き手の2人で1つの経験が語りだされ、生み出される体験を象徴していると考えられる。メルロポンティが「対話の経験においては、他者と私の間に共通の基盤が形成され、私の考えと他者の考えとがただ1つの同じ織物を織りあげるのだし、私の言葉も相手の言葉も討議の状態によって引き出されるのであって、それらの言葉は、我々のどちらが創始者だというわけでもない共同作業のうちに組み込まれていくのである」と述べているような世界が、要介護高齢者と看護者の間に豊かに創造されていくことは、互いのジェネラティヴィティを発達させていく好機になり得ると考える。この研究の今後の課題としては、要介護高齢者に「気遣い」の世界をあらわにするためのケア者との継続的な会話が、要介護高齢者の日常生活の豊かさに実際どのように結びついていくのかを検証していく作業が必要とされると考える。

<引用文献>

Erikson.E.H., Erikson. J.M, Kivnick. H. Q: Vital Involvement in Old Age, W.W.Norton & Company, New York, 1986, p.36

新木真理子：エリクソンの祖父母的世代継承性と高齢者の看護 - 臨床実習の場は「世間交流の場でもある」 - , 総合看護, 2005,40(3),17-23

新木真理子：特別養護老人ホーム職員のジェネラティヴィティと仕事の有能感の関連, 日本老年医学会雑誌,2011,48(6), 679-685

ハイデガー.M,原佑・渡邊二郎訳：存在と時間 ,p.149 - 162 , 中公クラシックス,2003

古東哲明、ハイデガー = 存在神秘の哲学、講談社新書 p.87、2002

松葉祥一、西村ユミ、現象学的看護研究 - 理論と分析の実際、p.59-64、p.73-77、2014

メルロ - ポンティ.M、竹内芳郎、木田元、宮本忠雄訳、知覚の現象学、p.219、1974

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計3件)

新木真理子、東玲子、神谷英二、要介護高齢女性の祖父母的ジェネラティヴィティの語り、日本老年看護学会、2013.6.5、大阪国際会議場(大阪)

新木真理子、東玲子、神谷英二、関節リウマチ高齢女性の祖父母的ジェネラティヴィティの様相、日本老年行動科学学会、2013.9.1、愛媛大学(愛媛)

新木真理子、神谷英二、東玲子、吉原悦子、丸山泰子、要介護高齢者の「気遣い」に着目した介入研究の可能性を探る、日本看護科学学会、2014.11.30、名古屋国際会議場(名古屋)

6. 研究組織

(1)研究代表者

新木 真理子 (ARAKI, Mariko)

西南女学院大学・保健福祉学部・准教授
研究者番号：20335756

(2)研究分担者

東 玲子 (AZUMA, Reiko)

西南女学院大学・保健福祉学部・教授
研究者番号：60184173

(3)研究協力者

神谷 英二 (KAMIYA, Eiji)

吉原 悦子 (YOSHIHARA, Etsuko)
丸山 泰子 (MARUYAMA, Yasuko)